
□ オペラ

堀内 修

新国立劇場のオペラ部門の芸術監督が、尾高忠明から飯守泰次郎に替った。ウィーンやミラノなら、歌劇場の芸術監督の交替は大ニュースで、新聞も大きく取り上げる。交替の少なからぬ場合がスキャンダル絡みなのも、それが世間から強い関心を持たれている証だろう。しかし東京では芸術監督の交替も、オペラ上演の変化も、一般市民から注目されることはない。当然ではあるが、それが現代日本でオペラの占める大きさに違くない。

1度もオペラの上演を指揮しなかった尾高監督だが、その時代が新国立劇場の停滞期だったわけではない。2014年にはコングルトの「死の都」が上演され、話題となった。新制作とはいえ、演出はヘルシンキの歌劇場で行われたものだったのだが、歌手の質も、演奏も、そしてカスパー・ホルテンの演出も高い水準にあった。

尾高監督時代の終りを飾ったのは、R・シュトラウス「アラベツァ」の再演で、監督の好みの反映ではあるのだが、こちらも悪くない上演だった。そして10月に新制作のワーグナー「パルジファル」で、飯守新監督による新しいシーズンが始まった。かつての先進的演出家ハリー・クプファーによるわかり易い舞台と、飯守新監督自身が指揮するゆったりとした演奏は、現代のワーグナー上演とは大きく隔たっていたが、多くの批評家や聴衆から好意的に迎えられ、新国立劇場の新時代は順調に始まった。

新国立劇場で「死の都」が上演された3月、滋賀のびわ湖ホールでも「死の都」が上演された。こちらは沼尻竜典が指揮し、栗山昌良が演出する日本人メンバーによる上演だった。たまたま同じオペラの上演が重なるのは珍しくないが、オペラが「死の都」となると、偶然とは言え驚かされる。これまで上演されてこなかったオペラが、突然脚光を浴びたことになる。その奥には当然時代の変化があるはずで、兩大戦間の文化に現在が接近しているのかもしれない。

一時は盛んだった海外の歌劇場の公演は、2011年以来その勢いを失っているかのように見える。2014年に目立ったのは、リッカルド・ムーティが率いるローマ歌劇場の公演だった。上演したのはヴェルディ「ナブッコ」と「シモン・ボッカネグラ」で、どちらもイタリアらしい保守的な舞台で、肝心なのはムーティの指揮とイタリアの第一線の歌手たちだった。スカラ座日本公演で大人気になった『ナブッコ』だったが、歌手の差もあって、この公演では「シモン・ボッカネグラ」の質が高かった。

ローマ歌劇場は日本公演の後しばらくして財政的な問題でムーティが辞任し、歌劇場自体の存続も危ぶまれる事態となった。イタリアのオペラの危機は、日本にも影響を及ぼしている。

しかしイタリアでも新しい動きはあり、その動きの筆頭ともいべき演出家ミキエレットが、ウィーンで手がけた舞台が、二期会の公演で紹介された。モーツァルト「イドメネオ」は、トロイア戦争後の混乱と継承を全面に出した上演で、二期会の歌手たちも力演した。説得力のある上演となったが、当然ながら賛否両論となった。

しかしこの「イドメネオ」と、そして新国立劇場の「カヴァレリア・ルスティカーナ」「道化師」などの上演が、世界的なオペラ上演の動きとつながっているものの、日本のオペラの動きは、むしろ世界との溝を深めているようでもある。東京以外の都市では特に、ポピュラーな演目の写実的な舞台と、日本的な歌唱との組合せが根強く支持されている。

一方で海外の歌劇場の公演が映画館で上映される「ライブビューイング」は益々盛んになっている。最も人気があるのはニューヨークのメトロポリタン・オペラだが、ロンドンの英国ロイヤル・オペラやパリ・オペラ座の公演も、1シーズンを通していくつもの上演が紹介されている。衛星放送などでのテレビ放送や、インターネットを通じての映像もあるので、かなりのオペラ・ファンが世界の一流歌劇場の上演に触れるようになってきているのではないと思われる。

昔のように、世界のオペラ界の動きは遠くで起こっているのではなく、日本にいるオペラに関心を持つ人にも、年々身近になってきているのはまちがいない。オペラのスターといえば、アンナ・ネトレブコやヨナス・カウフマンだが、2014年にこの2人は1度も日本で歌わなかった。それでも大勢の人たちが、2人を出たオペラの舞台を、いくつも知っている。日本ではあまり上演されないヘンデルなどのバロック・オペラも、新しい演出の上演も、直接ではなくとも、知っている。

バロック・オペラは福岡や兵庫で「ポツペアの戴冠」が上演されたり、東京の北とびあで「プラター」が上演されたりと、大々的ではないにせよ、少しずつ増えてきている。海外での人気とはかけ離れているが、これから盛んになる可能性が十分にある。だが、一時は実現したかに見えた、東京が世界の重要なオペラ都市になる可能性は、薄れてきているようだ。やはり2011年の震災と原発事故の影響が大きいのだろうか。

一方で新作あるいは現代の作曲家による日本オペラの上演は、少し盛んになってきている。新国立劇場では池辺晋一郎の「鹿鳴館」が再演され、沼尻竜典の「竹取物語」が初演された。愛知では丹羽明の「白峰」が初演されている。これだけ新しいオペラが上演されて、ある程度注目される国は、少ないのではないか。世界との溝を広げつつ、オペラを独自のものにしようとする動きが、進行しているのだろうか。

もちろん、世界と日本が直結したオペラ上演もある。まず松本のサイトウ・キネン・フェスティバルのヴェルディ「ファルスタッフ」だ。復帰を果たした小澤征爾でなく、ファビオ・ルイーザが指揮したのだが、これはいまま溝など感じさせない、世界的な水準の上演となっていた。

そしてリヨン歌劇場の日本公演がある。かつてブリュッセルのモネ劇場の芸術監督として、日本公演を成功させた大野和士が、今度はリヨン歌劇場の芸術監督となって、みずから指揮するオフエンバック「ホフマン物語」を上演した。この「ホフマン物語」は、すぐれた上演であるだけでなく、現代のオペラ上演の第一線に立つ上演でもあった。大野和士は日本のオペラ指揮者として、小澤征爾に次ぎ、世界のオペラの動きの真っ只中で活躍をしている。そしてこの公演は、日本のオペラの聴衆を直接世界の舞台へとつなぐ役割を果たすものでもあった。